

第39回

第6章 現代の諸課題と倫理

自然と倫理

今回学ぶこと

近代の科学技術の進展と、経済活動の自由偏重のもとで、さまざまな環境問題が起こってきています。私たちは、地球規模で、生態系について考える必要があります。環境倫理の思想の3つの柱である地球の有限性、世代間倫理、自然の生存権を考え、どのように持続可能な開発や社会が可能になるのかについて、考えます。



講師

千田有紀

■ 自然と環境問題 ■

産業革命以降、工業化が進められていくなかで、イギリスではアメニティ（快適環境、快適性）の思想が生まれ、環境破壊に対する厳しい態度が生まれました。1962年にレイチェル・カーソンは、『沈黙の春』という著書で、農薬の大量散布によって、生態系が破壊され、生物が死滅している架空の町を描いて警告していました。

科学技術の高度な進展をもとに、経済活動の自由の偏重が行われると、個人的利益追求が全員の最大の損失につながるという「共有地の悲劇」（アメリカの生物学者ハーディンによる概念）が起こりかねません。私たちの暮らす地球は、「宇宙船地球号」という言葉に象徴されるように、有限な物資やエネルギーを持つ閉じられた空間であると考えられます。

■ 環境倫理の思想 ■

環境問題を考える際には、環境悪化によって直接的に被害を集中的にこうむる人がいる反面、遠い位置で便益を享受できる人がいることに、注意を払う必要があります。

1970年代から欧米を中心に提唱された環境倫理では、地球の有限性、世代間倫理、自然の生存権という視点が重視されています。

地球の有限性を考える際に、閉じた有限の空間である地球において行われる活動は、必ず他者に影響を及ぼすことは、忘れられてはなりません。また、世代間倫理を考えたときには、同時性の倫理学を考えるだけでなく、ハンス・ヨナスのいうように、未来

世代のための未来倫理を考える必要があります。また、自然の生存権という視点を考える際には、生物やそれを含む生態系そのものに、内在的価値や生存権を認めて、人間が一方的に自然を利用することに対しては、懐疑的になる必要があります。

■ ■ 自然との共存とは ■ ■

生態系（エコシステム）とは、植物は太陽を利用して光合成を行い、その植物を動物が食べる。動物が死ぬと、土壌の微生物が分解し、その養分を植物が取り入れるように、私たち生物はみな、太陽のエネルギーを受けていて、水や土壌、空気などとともに連鎖して、循環しているシステムのことです。

私たちはこの生態系を破壊しないように、“think globally, act locally（地球規模で考え、足元から行動を）”という実践を行っていかねばなりません。持続可能な開発や持続可能な社会を実現するためには、私たちが今まで推し進めてきた科学技術の高度な発達や経済活動の自由の偏重を見直し、スローダウンさせて、国境を越えて地球規模で解決しなければならない問題に、地道に取り組んでいく必要があります。

